

第八十七回六甲会

(令和八年九月四日)

稲畑廣太郎選

兼題「秋の灯・根釣」その他当季雜詠

第一句会入選句

秋灯下落とした嘘の欠片かな
大月浩子
歳時記の傷みは誉れ秋灯下
森岡喜恵子
音盤に針を落として秋灯下
武本満子
もう母と呼べず二人の秋灯
奥田好子
秋の灯や路地裏をもたつてをり
大月浩子
○岸釣の底は奈落か龍宮か
武本満子
活用を確め秋の灯を消しぬ
山田佳音
いつしかに岸と一体根釣人
森岡喜恵子
○竿先のびゆんと潮風切り根釣
奥野千草
七つ星眉の高さに置き根釣
山之口倫子
岸釣の家族類ばる塩むすび
山田佳音
タイガース勝てば煌めく秋灯
山田佳音
秋灯を錨に沈め巨船泊つ
山之口倫子
それぞれの灯下親しむてふ個性
松村咲子
根釣人夕日の中に嵌りけり
伴 明子
波音と夜を語らひ根釣人
西脇英恵
箱階段かがみ秋灯下の卓へ
足立朱麻
装丁も漱石のものの秋灯下
惠島祥一朗
膨れたるオレンジの背ナ根釣人
足立朱麻
積読の影もつくりぬ秋灯下
惠島祥一朗
満潮の刻得て根釣日和かな
足立朱麻
海原の軒先借りて根釣かな
伴 明子
一部屋に一つの机秋灯
足立朱麻
○氣に入りの仕掛けで地球釣る根釣
池本準一
朗読に聴き入つてゐる秋灯下
西脇英恵
秋の灯や風に吹かれてボブデイルン
一坪信舟
○虚子句集写す墨する秋灯下
伴 明子
鳥獣の戯画を飛び出し秋灯
西脇英恵
岩礁の穴場独占して根釣
一坪信舟
○秋灯下来し方語る夫婦碗
武本満子
釣果より足場気になる根釣人
森岡喜恵子
秋灯下コップに水のまろみかな
大月浩子
白波に夕影鎮め根釣人
奥田好子
秋の灯や生産終へる蛍光灯
湯川晶月
点点を根釣の人の黒き黙
平尾孝子
茅渚海暮色の中の根釣人
多田羅紀子
明日のこと考へてゐる秋灯下
谷本房子
ペン先に秋灯囲む雨の音
北上美佐子

秋の灯を分かちて寮の二人部屋
長安悦子
磯に立ち地球踏みしめ根釣せり
舩山美貴
ビオロンの切なき音色秋灯
徳永由起子
腰据ゑて餌落とし込む根釣かな
中島庸子
秋灯を葉り季寄の旅続く
山之口倫子
秋灯下話俳句のことばかり
徳岡美祢子
原罪の重さを知りて根釣人
湯川晶月
岸釣のこざかな提げて友来る
蔭山夢宙
潮満つるまでの勝負と根釣人
槌橋眞美
静けさは音の余白や秋燈
湯川晶月
秋の灯をすつぽり浴びて眠る猫
舩山美貴
瀬の音に昏れゆく貴船秋ともし
上田光子
根競べ始まる岸辺根釣かな
谷本房子
○秋灯や吊る能面の影深し
徳岡美祢子
根釣とて塩屋のテトラさ迷ひぬ
蔭山夢宙
○スコッチの琥珀の綺羅や秋灯下
武本満子
秋の灯を滲ませポートタワーブルー
山之口倫子
雨の中集ふ俳人秋灯下
中村澄子
ジムで風呂秋の灯はまだ三時頃
小川孝子
竿よりも沖を見てゐる根釣人
小林志乃
朝からの根釣の釣果間のびして
小林志乃
醍醐味は試練の先に根釣かな
池本準一
秋灯下手酌の夫もほろ酔ひに
辰巳葉流
○まどろみを破る高波根釣人
中本 宙
根釣人黙を紡いでをりにけり
平尾孝子
秋灯下時と心のほどけゆく
中島庸子
○秋灯へ銀髪チエロを抱へ出る
三好ようこ
岩礁の下の攻防なる根釣
多田羅紀子
レコードの針の掠れや秋灯下
石角節子
倅には負けぬ根釣や芦屋浜
大西美知子
潮を讀み穴場熟知の根釣人
石角節子
六甲へ秋灯を積み上ぐる街
三好ようこ
餌取の雑魚と遊んで根釣果つ
藤田敦雄
岩に足ぶらぶらさせて根釣人
辰巳葉流
秋灯下町史に残る父の顔
上田光子
文机は吾のよりどころ秋灯下
徳岡美祢子
飼猫に見詰められゐる秋灯下
谷本房子
秋灯や学生寮は新学期
大西美知子
秋灯下一書を抱き峽の宿
中本 宙
秋灯の窓へノックの音は誰
辰巳葉流

二人居て相寄らぬ距離根釣かな

岸釣の旅人といひ良く釣れて

秋灯をグラスに隅のカウンター

今治に転勤をして根釣かな

昇降機より秋の灯の街美しき

岩礁の隙間をねらふ根釣人

秋灯を分かち夫婦の卓一つ

秋の灯に文字から文字へ書に遊ぶ

空青し根釣の波止のにぎり飯

夜毎聴く短波放送秋灯下

燈下親し古きアルバム出してみる

黄昏の汐を引き上ぐ根釣かな

若き日の意欲よ戻れ秋灯下

かみ合はぬ会話に疲れ秋灯下

秋灯や窓の古墳の闇深く

秋灯下はね橋を見るゴッホ展

夕風が又根釣人連れてきし

灯火親し母娘の会話尽きもせず

根釣人魚籠の釣果にほくそゑむ

灯火親し時折山の方を見る

潮風に気分の上がる根釣かな

秋灯やシヨパンの聞こゆ喫茶店

一人づつ好きなこととして秋灯下

粘り勝ち勘を頼りし根釣かな

直木賞作家の逝きて秋灯下

秋の灯を楽しみながら酒を酌む

秋灯下光の君の残り香か

秋灯やゆるり点滴落ちて行く

海光に尖る指先根釣人

○秋の灯やグラスかたむけ夜想曲

高温は海にも来ぬと根釣人

秋灯下愛の軌跡のエメール

◇ ◇

(廣太郎先生出句)

病室の生活にも慣れ灯下親し

秋灯を消して病棟てふ静寂

寝釣人テトラポッドを占拠して

看護師の灯下親しく手厳しく

先づ竿に拘ることも根釣人

第二句会入選句

秋灯や思はぬ沙汰を聞きとめる

声潜め影もひそめて根釣人

眠れぬ夜注ぐワインに秋灯り

災禍にも星降る夜の根釣かな

○崩れ来し根釣日和の波の色

又竿の折れてしまひし根釣かな

病名もなくて臥したる秋灯に

○秋灯下地元舞台のサスペンス

岸釣や今日も馴染みの揃ひたる

岸釣の箱魚籠の影カップ酒

秋灯の消えて闇夜の迫りくる

根釣人時をり赤き煙草の火

船も去り孤独な闇を背に根釣

秋の灯や妻何処へとひとり旅

様々の翁の面や秋灯

黒潮の波寄する岩根釣かな

○秋の灯に染まる頁に文字沈み

慰問文秋灯覆ひ書きし日も

秋灯に黙して鬱か黙考か

秋灯下おくのほそ道かぢり読み

魚の知恵悔り根釣人悲し

落ちやせぬか白波かぶつて根釣

学問に齢は問はず秋灯下

灼けし磯黙して根釣影ひとつ

灯下親し夕餉終れば帰る子と

秋の灯にワイパー頻りハイウエー

秋の灯のヘッドライトや母へ急ぐ

灯下親し齢重ねてゆくほどに

○恋文のために摺る墨秋の灯に

根釣してゐる間に海は色変へて

秋の灯を走らせ窓の雨しづく

チャレンジは残さざる悔い秋灯下

秋灯の日日刻々と早まりて

秋灯の影濃き声を聞く虚子館

旅終へて秋灯の待つ我が家かな

平明と余韻むつかし秋灯下

○秋灯の船軽快に闇滑る

夜半まで秋灯のあり研究室

十畳の秋灯暗くおわら舞ふ

本郷桂子

林 曜子

新田佐代子

奥山登志行

生澤瑛子

高橋純子

林 曜子

南波喜久子

河辺さち子

高橋純子

新田佐代子

藤井啓子

本郷桂子

宮地若木

辻田あづき

辻田あづき

宮地若木

田中由子

生澤瑛子

岡本やすし

宮地若木

田中由子

北井真有美

新田佐代子

田附光映

北井真有美

北井真有美

田中由子

玉手のり子

田附光映

本郷桂子

北井真有美

高木雅恵

奥山登志行

高橋純子

岡本やすし

奥山登志行

高木雅恵

辻田あづき

○あかときの空の湿りに根釣人 玉手のり子

酌む者も酌まぬも憩ふ秋灯下 南波喜久子

○根釣人深き鰯の手海語る 新田佐代子

○踏ん張りし岩は凸凹根釣人 田附光映

○読み返すほどに恋ふ過去灯下親し 本郷桂子

岸釣のなべて異形のもの旨し 玉手のり子

秋灯下より美しく見ゆ同級生 柄川武子

三冊と決めて絵本を秋灯下 高橋純子

沖へ出る舟の波打つ根釣かな 本郷桂子

秋の灯の遠くに透ける里の景 田附光映

語らずも釣果は顔に根釣人 河辺さち子

秋とし鍵付秘密日記帳 藤井啓子

友一家餌は平氣と根釣の日 高木雅恵

落城の大河ドラマや秋灯下 岡本やすし

近みちは細みち灯下親しかり 林 曜子

広島の間は秋灯川明り 奥山登志行

秋灯を連ね神田の古書祭 生澤瑛子

ビル街の夜景積み上げ灯下親し 田附光映

澄む闇を秋灯射貫く星光る 奥山登志行

アラビアンナイト一夜目秋ともし 藤井啓子

ふと風の水の匂ひよ根釣なる 平田 恵

○和綴なる病間日誌秋ともし 藤井啓子

岩ひとつ決めて始まる根釣かな 玉手のり子

隣り合ふ根釣の竿の遠からず 柄川武子

ひよいひよいとテトラポッドを根釣人 高橋純子

一船に根釣ポイントへと移動 河辺さち子

団欒の浮かび来し窓秋灯下 南波喜久子

◇ ◇

(廣太郎先生出句)

秋灯下看護師の声柔らかく

秋灯と吾を乗せ走る救急車

当てにせぬ夫の根釣の釣果かな

防波堤犇き合うて根釣人

入院も灯下親しきものとして

◎次回第88回六甲会は令和8年12月4日(金)開催です。

兼題 笹鳴・ストーブ